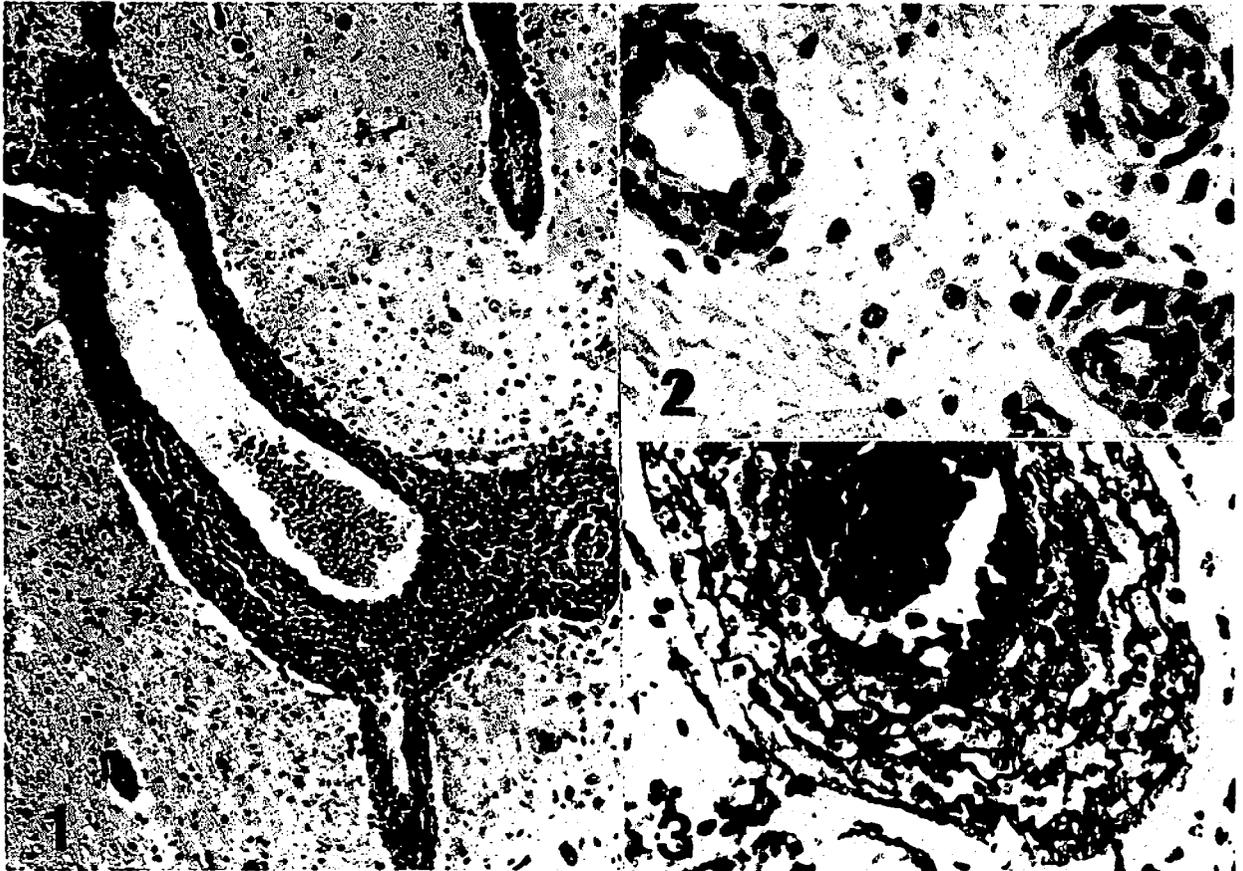


犬の大脳

東京農工大学農学部家畜病理学教室出題 第22回獣医病理学研修会標本No.373



動物：犬(柴犬)，雌，1才。

臨床事項：1981年4月に発情があり，その後，5月初旬より嘔吐，胃腸障害が指摘され加療。5月14日，嘔吐，沈うつ状態。5月21日，異常食欲亢進，異常運動（右斜め前方のみへの歩行，時に時計の針と逆回り回転，摂食時に舌が右に片寄る）の神経症状を發し，神経型ジステンパーと診断。5月22日，安樂死，直ちに剖検した。

剖検所見：主要臓器には特別な変化はみられなかった。

ウイルス学的検査：ジステンパーについてウイルスの分離陰性，中和抗体は10倍以下を示し陰性であった（医科研）。

組織所見：脳脊髄の他には主要臓器にみるべき変化は観察されなかった。脳における5つの横断面，頸髄，腰髄にはほぼ同様の所見，すなわち，神経細胞の変性，囲管性の顕著な細胞浸潤があった（写真1, 2, H-E染色）。浸潤細胞はリンパ球，好酸球，単球，プラズマ細胞，マク

ロファージで，なかでも好酸球の占める割合が多かった（写真2）。これらの病巣には細網線維の増生が観察された（写真3，鍍銀染色）。その他頸髄には軽い出血性変化はあったが，膠細胞や髄鞘の著名な変化は見出せなかった。

本例のように所謂非化膿性脳炎病変に好酸球が多数浸潤していた所見に注目し，寄生虫症，実験的アレルギー性脳炎，Reticulosis，好酸球脳炎との異同について検討を加えた。その結果，虫体，虫道の欠如，脱髓性変化の欠如，軟化病巣の欠如などから一連の疾患と性質が異なることを指摘した。

組織診断：かなりの好酸球が参加した犬の髄膜脳炎（原因不明）。

討議：この程度の好酸球の参加は非化膿性脳炎では珍しいことではないとの指摘があった。